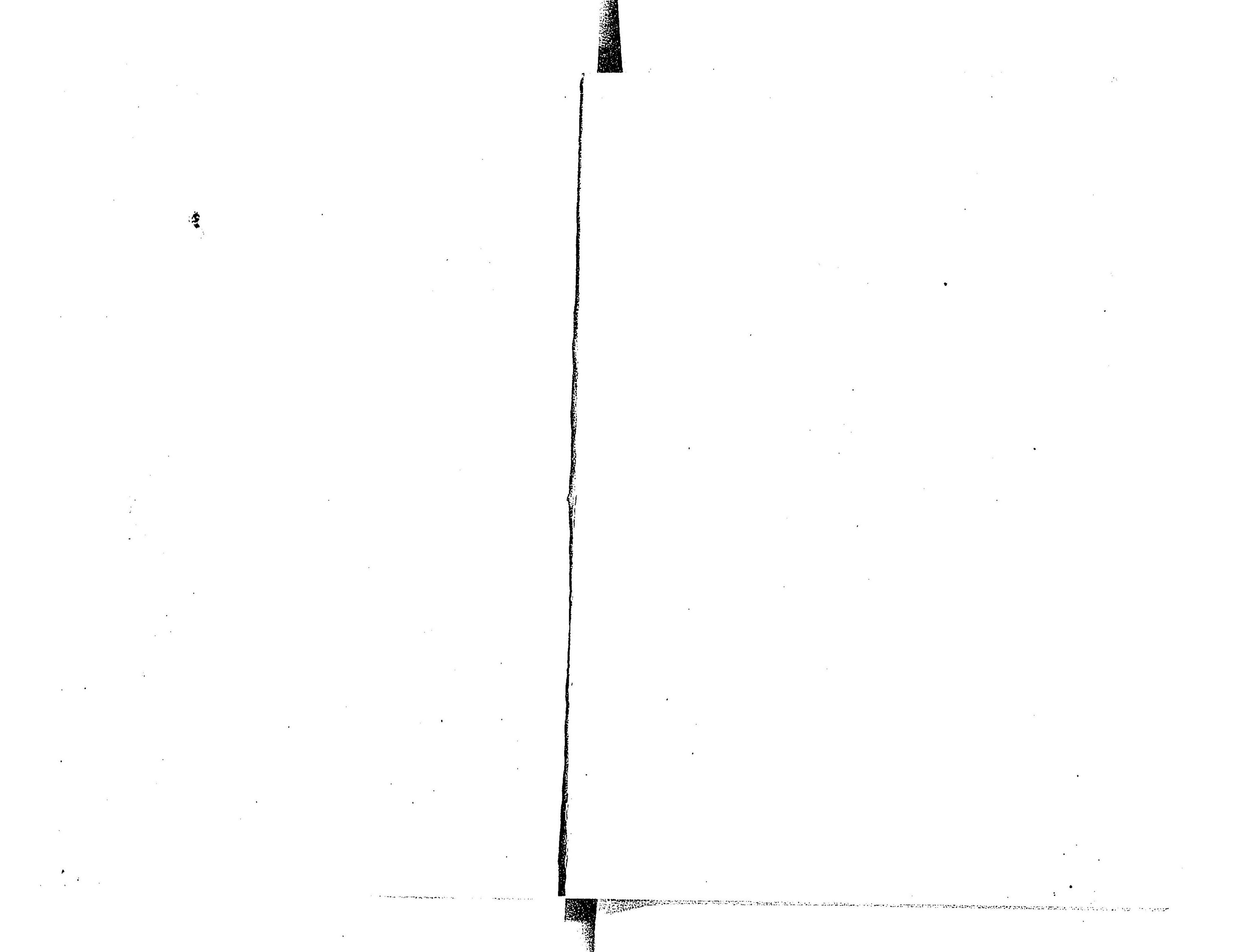
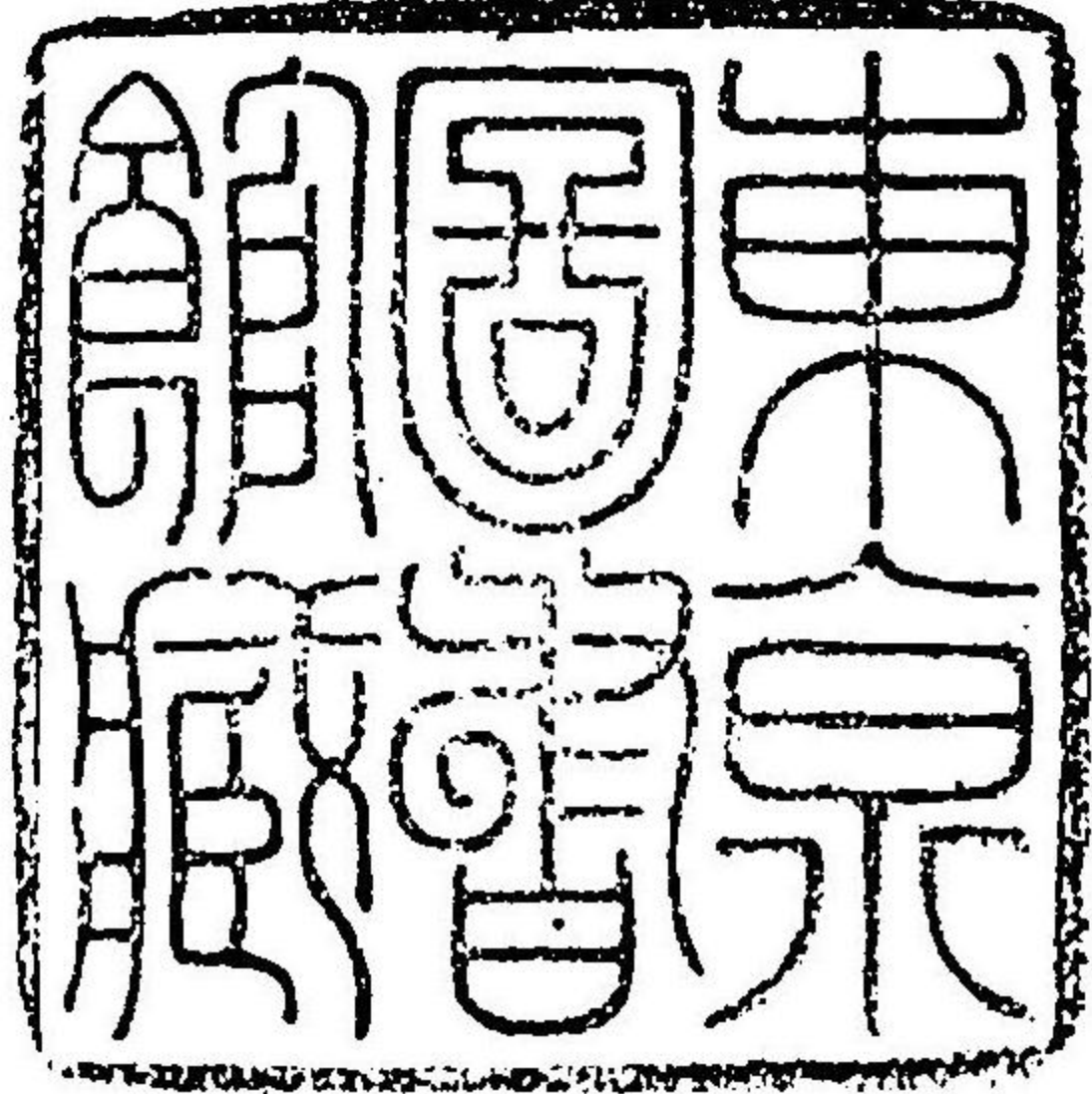


妙明心源略鈔
全



特45

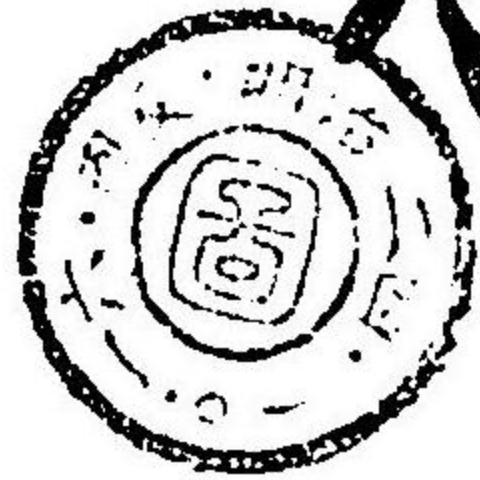
888



可從移心也

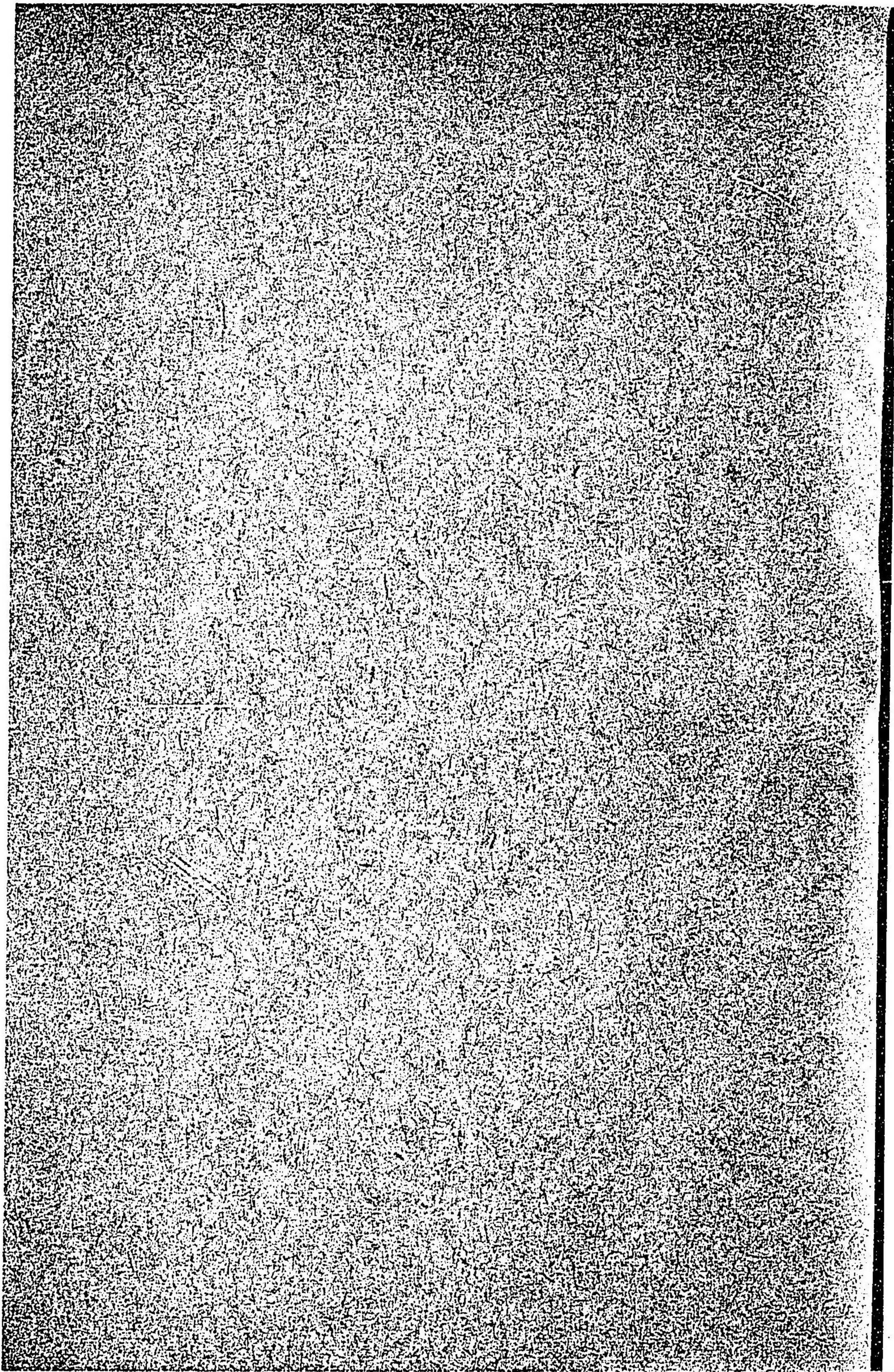


明正甲午年九月



松風吟
江之昭也





妙明心源心源

妙明始末不二

高路正令

七十三歲原坦山題



妙明心源略鈔自序

龍樹祖師曰く。佛法大海。信爲能入。智爲能度。と至れるかな。斯の言
や。夫れ佛海は。廣大深遠にして。其涯涘を究盡すること。能はさる
如し。然れども。能く究盡するにあらざれば。佛智見を七通八達し
て。化度門を開くとを得ず。何を以て究盡の道と爲す。仍ち曰く。信
以て入る可く。智以て度る可し。祖師豈に我等を欺かんや。我等大
日本皇國に成長し。今や維新文明の德澤に薰沐す。何の幸福か。之
に如かんや。茲を以て。潛心して。眼を宇内の佛教に注ぎ。翹足して。
耳を各宗の法門に傾くるに。各宗各派の所説悉く是れ佛の慈悲
を相續し。物の爲に軌とあるの親言親句にして。大小權實頓漸半
滿一として眞理にあらざるはなし。總に是れ苦海の智船にして。

迷途の法炬あり。佛道の要機闕くるとおし。此を以て彌々我か皇國は。是れ世界最無上の宗教國にして。廻ち大乘極致の法身報土たることを信す。宜あるかな。皇國往古は。歴代 聖天子。皇子。王孫。賢后。貴嬪。篤く三寶に歸依し。出家具戒の儀を表し。辱く十善の天子を以て。自ら稱し玉ふものあり。上の好むところ。下として之より甚しきことありと云ふ。古言の虚しからざる。當時公卿臣僚より。朝野の人傑競つて。出家入道するもの。枚擧するに遑あらず。國史に昭昭たり。然る所以は何そや。佛敎の以て皇化を裨益するの。冥契あるに由てなり。否なれば。孰れか佛敎を信するの。此の如く旺あるを致さんや。世降て道の陵遲するは。諸道の浩歎する所なり。獨り佛者の歎のみにあらず。近世我邦の佛法を觀ずるに。法の

衰へたるに非らず。佛者が宗教心に於て。冷淡あるを看る。其咎めは誰にか歸せん。世の佛敎者か。漫に皮相に苦しんで。其本源に遠かる。是れ冷淡の招されども。到る理あり。若し夫れ本源に歸向して。接物利生の妙術を施さずんば。佛敎の利益は。那處にわらん。或は云ふ。豈に皮相を事と爲さんや。本源の到り易からざる。斯に苦しむのみと。佛敎は深妙あり。偏倚する所なし。大小權實あり。苦行易行あり。人々箇々。機に應じて入處あり。世の佛敎者と稱するもの。或は大小乗の差別を説き。或は權實相の區分を談し。委しくは。五蘊十二處。十八界。戒の詮議に涉り。法門名數の學に泥み。一實大乘の根理を。單一に修行することを勉めず。要するに莊飾に傾て。眞味を忘る、なり。然らば此黨の學者を。悪くむか。否々。悪くむ可

きにあらす。佛教は八万四千の寶法藏を盡くして足れりとせず。教相者流が宏遠なる法門に依て。法身を尋求する。此れも亦た出家の行道あり。愛す可く貴ふ可し。然り而して我等は此末世に於て。機を視て道を談せんと欲す。未だ莊飾を意とあすに非らず。只同行者を導て。簡單にして。疾く佛教の眞理を解説するの道を開かんと欲す。況や今日邦土は。開明の運に遇て。化外人の雜居するもの。日に月に多きに到る。化外人等亦た各々奉ずる所の宗教あり。以て我か佛教に較せんとす。此時外人等若し邦人に向ひ。卿等か奉ずる所の佛教は。何の道理を以て。宗を立て何の依所を以て。信を置くやと問はん。に言語は且つ不十分に。情謂も自から殊異なる。化外人に對し。満足を與ふる爲に一句了然たるの答處。な

る可からす。且く道へ。邦人は何の言説を爲すや。我等は口を緘て。彼等の嗤笑を買ふとを冝せず。若し我等嗤笑に逢は。一人の慙愧に非らず。佛教を瀆すあり。佛教弘通の邦土を汚すなり。佛教者たるもの平生の心操は。爰にある可し。必ず一句了然の答辭を貯ふ可し。且つ此一句は。實に化外人を度するのみならず。閻魔大王に授記するの一句なり。盡天盡地あり。六種震動なり。凡そ佛者流に限るにあらす。世人請ふ精細を着けよ。我等此一句を求むると。年久し。空原に水を求むる如く。大虛に雲を抓む如く。漠焉として。方處を得ず。然りと雖ども。此道必らず無きに非らざるとは。信して疑はず。夙に昏に思て休せず。一日碧巖集。種電鈔を讀む。其中に。宗の字を解する鈔に。曰く。佛祖所宗者。以妙明心源爲宗也。と云

ふ處に到て。從來の疑團頓に氷解したり。此語乃ち是れ一句解説
直解説の道なるを信得及す。是よりして之を拈提し。朝誦暮念
參究鍊磨して怠らす。遂に妙明心源を宗と爲の一句。盡世界を蓋
ふて漏らさざるの境に逮得す。吁。種電鈔曾て讀まざるに非らず。
這回讀んで此一句子に撞着す。窮兒父に遇ふの感あり。思はず手
を開て人前に説向す。云く妙明心源を以て宗と爲す。是耶非耶。
于時明治廿四年仲秋日

妙明道人安達達淳揮筆於
東京旃檀林中吉祥精舍

罰令通覽ノ儀ハ六月上旬ヨリ送本可爲致旨兼テ御通知
致置キタル處最初ノ豫定ヨリ法令類ヲ増加スルヲ數十
ノ多キニ及ヒ從テ片紙モ増殖シ無據豫定ハ十八行三十
六字詰ノ處俄カニ十九行ニ革ムル等彼是遷延致候得共
不惡御諒知ヲ乞フ尙本書ハ意外豫約申込有之ニ依リ落
丁等豫備ノ爲メ聊カ余分ニ印刷仕候ニ付御入用ノ向ハ
全盟申合規則ニ準シ至急御報知被下度然ラハ直ナニ送
本爲致可申候也

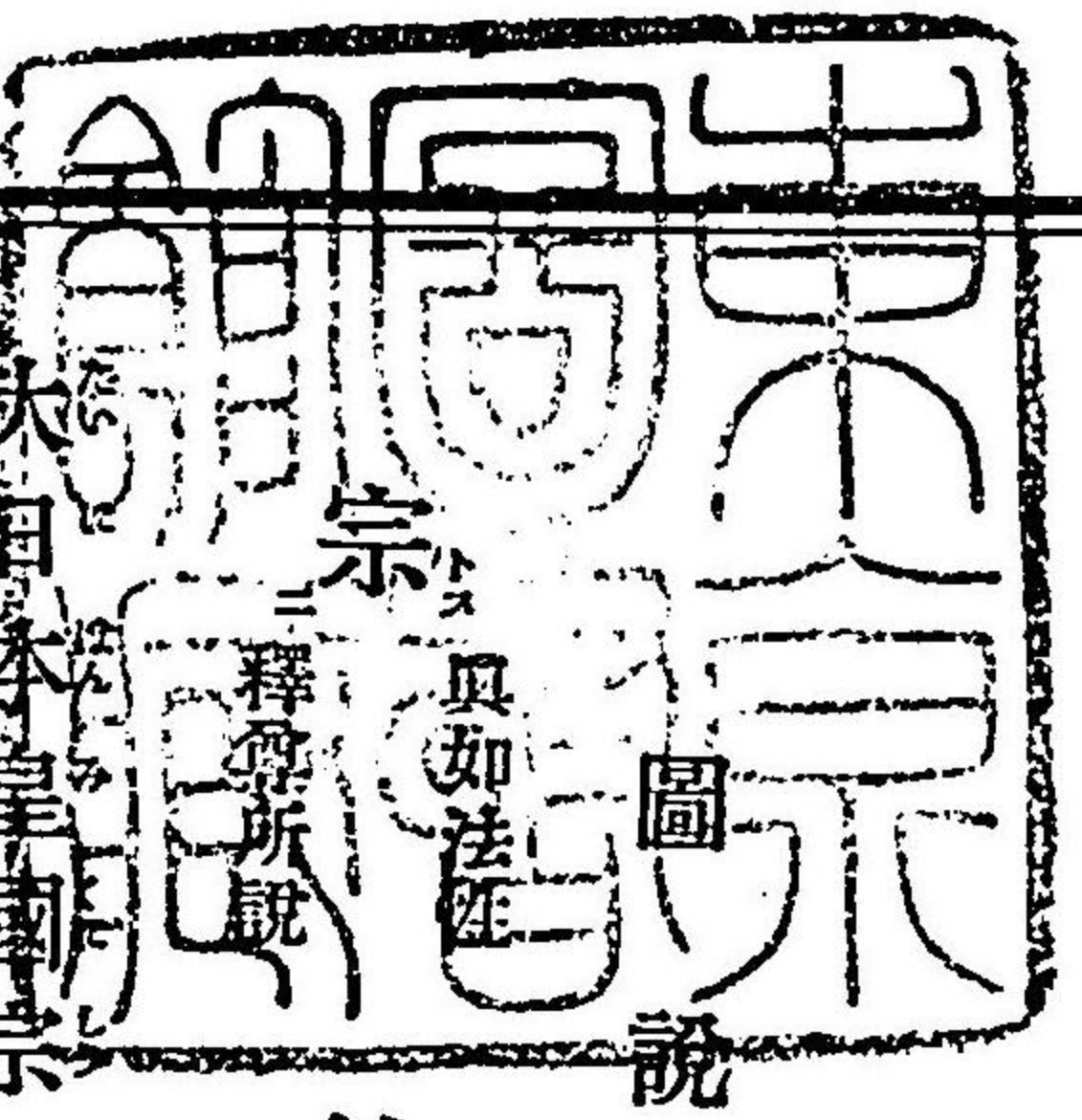
明治廿四年八月 岸本武雄 拜

追而編年目錄ハ假令本書中編纂ナキモノト雖モ必要ノモノハ悉ク掲
載スヘキ筈ナリシモ最初ノ豫定ヨリ頁大ニ増加シ無據印刷ノ都合ニ
因リ通覽ニ現在スルモノノミヲ編セリ不惡御諒知ヲ乞フ

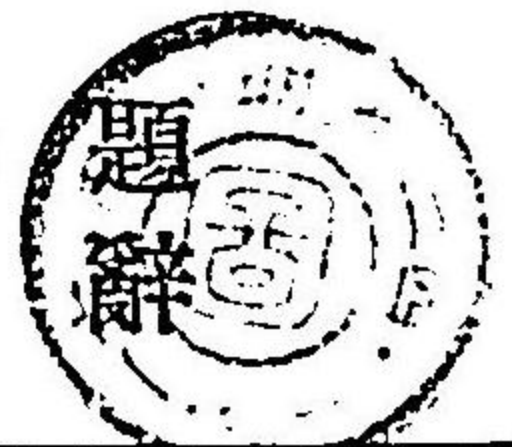
千四百有餘年星霜の久しきを閱し利國安民の實効を奏したる

ふ處ところに到いたて。從來まじかたよりの疑團ぎだん頓とんに氷解ひょうかいしたり。此語このことば乃すなはち是これ一いつ句解くげ説せつ

妙明心源略鈔并圖解



遠州可睡齋西有穆山禪師
 信州靈松寺安達達淳禪師 講義
 全 源長寺佐藤騰雲和尚 筆記
 東京佛仙會長原坦山禪師 校閱



妙 天地萬物 無始無終
 明 一見明星 轉凡入聖 大慈大悲 下化衆生
 心 心佛及衆生 是三無差別
 源 靈知不昧 寂照無遺

大日本皇國宗教の起原を尋ぬるに人皇三十一代欽明天皇の御
 宇佛教印土より傳來す之を東漸の始とすしかせしより以來一
 千四百有餘年星霜の久しきを閱し利國安民の實効を奏したる

は無上正覺中道實相の法門あればなり故に歴代聖明の天子篤く三寶に歸依し玉ふこと歴史に徴して昭々たり中に就て得度具戒の天子數代あり後宇多天皇遺詔に曰く我大日本國は法爾稱號秘教相應法身の土なりと有るとき至尊尊崇の玉詔たりと雖も佛教者此玉詔を奉戴しては殊に頭上の鍼砭となし努力して佛教の宣揚を圖らざる可からず山僧古稀の餘齡に及んで明治の盛運に遭遇せしこと何の幸福そや嗚呼佛天の加護に非らずんばいかてか此光榮を蒙らん已に緇流に居り此光榮を擔ふ此を以て心を宇内の佛教に潜そめ意を各宗の法門に委するに各宗所説の法門に於て大小權實頓漸半滿其宗趣を殊にすと雖も總て是れ妙明心源より磨出し來るの光明なり佛教傳播の國

土多多これ有りと雖も大小顯密の奥旨を傳へて釋迦如來の慧命を相續するは我か皇國を以て最無上と稱す可し皇國佛教の盛運已に斯くの如し世の宗教者は何の感を爲すや國土の恩即ち歴代聖天子宗教加護の皇恩救濟の恩即ち釋迦教主靈山授記の佛恩如何んか報酬せん若し此の傍に如何あるか是れ汝か奉する所の宗教と問ふ者あらんに諸宗門は各宗の奉する所を以て答ふるか此は是れ一部の宗教あり諸宗の相に涉らす如來は何の宗に依り何の教を立ると問んに佛教者は之に對し必ず一齊に簡單なる答處あかる可からず宗々門々乖離の答を爲して可ならんや各宗各派開宗の祖師世執は既に除くと雖も法執尙は在り東方に直指の苦行を講すれば西方に方便の易行を演す

動もすれば宗派の區域を論して恰かも怨讎相視るの思ひを
すものあり怨讎相視るの弊よりして見處を齊一にすること能
はず爰を以て佛教者中佛教の本源とあす大綱を領得するもの
あし佛教の極致を一にすること難きを致す浩歎に堪へざる處
なり化外人の雜居を許されれば彼等と合壁隣接す可し此時彼
等奉する所の宗教と邦人奉する所の宗教と抗敵を試みんに我
か宗教は八宗九宗其旨を殊にすと云は、佛教の全體は五崩す
可く我等は彼の門徒に對し日本宗教者たるの顔貌を失はんこ
とを怕る道德道念の趣向は法律と雖も遏止せざる所あり道德
道念を支配するは宗教あり我か宗教を以て彼を道德に導くは
國土の光輝あり彼か宗教を慕つて我か道念を倚するは國土の

光輝を彼れに與ふるなり此の場合に於て道德道念に依て國土
の光輝を保つは宗教者の責任なり豈に一日も安閑に度る可け
んや我か大恩教主釋迦牟尼世尊は三界の大導師あり圓音獅子
吼して法として説き盡さゝることあき廣大無邊の法門あり何
そ彼れを導利するに捷徑にして簡易なる一句を遺こさゝらん
や是れ必らず之れ有らん有ることば信して疑はざるあり悲ひ
かな菲學狹隘未だ其の在る處を實證せず思て此に到る寢を安
しとせず食を甘しとせず搜羅苦索して復た年を経る一日園悟
の碧巖集を校す其種電鈔に宗の字を釋して曰く宗者妙明心源
爲宗と云ふに到て他日の角駄一時に卸却す大喝して呼て曰く
佛教未だ地に落ちすと起て天地を拜し本師釋迦文佛を禮拜し

了て鼓を鳴らし衆を集めて妙明心源宗の五字一句を法益す法
益筆記は册尾に載す語に云く一句了然超百億と只此一句實に
了然なり是れ蓋天蓋地なり唯獨自明了なり一代藏經の關鑰
り釋迦世尊の三十二相八十種好なり佛教者流の心身骨髓あり
此語これを卷て懐にするときは百方所問に應して惑となし彼
の化外人に授けて渠をして道德道念に歸止せしむる亦た此一
句にして餘り有り退て思ふに我等幾回か此種電鈔を讀む讀ん
どに曠野に驟雨に遇ふごとくなるにも非らず性魯鈍書を讀ん
て快疾あらず事は諳せされとも理は稍く心に記す而るに此一
句未だ曾て記せずして今や新たに此句に撞着す是も亦た因縁
の會合なるかな

初に妙明心源の妙字を釋す可し凡そ世界の建立誰か之を妙と
謂はさらん日月星辰より森羅萬象其の間に羅列して敢て位を
紊さす誰か此の創立を主宰する誰か此の創立を妙と云はさら
ん若し神造天地の説に依らんに神の出處亦た妙と云はざるを
得ず世界既に妙あり世界に含有する萬法一切妙に歸せざるこ
とを得ず即此れ妙は一切法究盡の處を云ふなり
次に明字を釋す明とは明々地出現の謂なり妙の極處に到て爰
に位着するは凡夫衆生の事あり如來は妙の極處を究盡し發轉
し來て此明々地に修證す八千遍往來積功累徳の法身佛にして
雪山六年の端坐あり臘八の曉天一見明星の蹤跡を止む果滿圓
成の老釋迦眉毛落地せしや何ぞ此の如き老耄沙汰を爲すや是

他なし即是れ明々地修證の三昧を示し白毫光の一分を遺して
 兒孫に幸するあり如來心宗規範なり今日佛教者たるもの誰か
 此白毫光を被らざる此心宗を繼かざる此心宗を繼く者争でか
 自流自宗を立することを得ん悉く是れ此白毫光中に在て此心
 宗を相續するものあり前に云ふ妙字は因地となり此に釋する
 明字を現成するものあり
 次に心源の義を述す可し爰に云ふ心とは第八識心王所邊の心
 と異あり心意識智等の心を謂ふに非らず心は眞ありと釋し眞
 の一層上級に居るもの心あり爰に用ふる處は三十二相八十種
 好を離れ如來の眞實眞を表徳して暫く心と云ふ此心亦た萬法
 に於て具ばらざるものなし鴉鳴雀噪心あり雨竹風聲心あり情

非情動不動物々現成の心なり達磨は心外無別法と説く亦た心
 識の心を云にあらす動不動形無形體即心心即體にして所作に
 涉らす思慮に落ちす満目青山脱體現成なり此れ之を心と云ふ
 此外法の求む可きなし乃ち心外無法の謂なり
 此章の心字訓にユ○ロ○とよむは大にわるし音にシ○とよむ
 べしユ○ロ○と云ふ義は無し
 如來は眉毛を惜ます踪跡を隠さす修證一如の道を以て衆生面
 前に投出す此を心源の淨躰々赤洒々と云ふ大慈大悲の星塵あ
 り
 此時靈山會上八万の大衆あり妙明心源の道理誰か聞取せさら
 ん心源爲宗の道理誰か理會せさらん豈に何んそ獨迦葉尊者の

みに讓らんや而るに如來が金鉢羅華を拈出するに當て八万の大衆中一人の座より起つものなし迦葉尊者のみ有て破顏微笑す借問す他の八万は是れ聾か是れ啞か讀む者乞ふ細に眼を着けよ不見や前に釋する妙の一字衆生皆な此妙の極處を知らざるに非らず知て而して此極處より發轉し來て修證を取ること能はず神通は他の目蓮に還す惜哉進取の分なし佛言く我に正法眼藏涅槃般妙心實相無相の法門あり摩訶迦葉に附屬すと何の造作も無く妙明心源の附屬あり實相無相の授受なり此妙心を附屬し此實相を授受す此よりして展轉して今日に到る宗教の根元なり佛法の宣揚なり故に云ふ妙明心源を宗と爲す良久して曰く讀者幸にして會す麼

震旦初祖菩提達磨圓覺大師は法を般若多羅尊者に嗣き釋迦牟尼如來より第二十八世嫡々面授正法正主の祖師なり初め南印度香至大王に三皇子あり一は月淨多羅二は功德多羅三は菩提多羅と云ふ菩提多羅乃ち初祖大師の幼名あり時に香至大王は般若多羅尊者を崇信し常に宮中に請して聞法す尊者三皇子を見て其智能を試むるに初祖の神慧に驚き此れ聖者の降誕にしてしかも眞の法器なるを感す而れども時の未だ到らざるを觀して敢て黙過せり之を久ふして香至大王崩去す衆臣宗族みあ號絶するに獨り初祖のみ父王靈柩の前に在て定を修すると一七日忽ち起て般若多羅尊者の許に到りて出家を求む尊者時已に熟するを知て之を許し出家具戒せしむ余曾て一善智識の説

を聽くに初祖の出家は十五歳なりと云云今諸傳記を按するに
 年紀を記せず何に據て説かれしや具戒の後尊者の室に入て七
 日坐禪す尊者廣く坐禪の妙理を説示す初祖聽畢て無上地智を
 發す尊者曰く汝諸法に於て已に通量を得たり夫れ達磨とは通
 大の義あり宜しく名と爲すへし茲に因て名を菩提達磨に改む
 此處室内面授大法相承の大義を説くなり夫惟れば過去七佛
 面々授々の大法を以て釋迦世尊に至る七佛眼睛に釋迦あり
 釋迦眼中に七佛あり廿七傳して般若多羅に至る般若多羅眼
 中に七佛廿六祖あり七佛廿六祖眼中に般若多羅あり七佛廿
 六祖を一々數ふるに非らず七佛廿六祖の眼睛は般若多羅の
 眼睛に存して現成せり此眼睛を以て達磨に面授す七佛廿七

祖を並列するに及ばず達磨の眼睛に七佛廿七祖の眼睛を成
 就し現成するあり之を大法面授と云ひ之を面授の大法と云
 ふなり

初祖得法の後更に問て曰く既に得法す弘通の方法いかん尊者
 示して云く汝得法すと雖ども暫く南天に止まり我が滅後六十
 七載を待て震旦に往て大器を接すべし彼の土に菩提を得んも
 のわけて數ふべからず小難あり起るとあらん宜く善く自から
 降すへし

傳光錄爰の文(小難あり 中宜善自降)とあり四字解す可からず
 傳燈錄には(水○中○文○布○自○善○降○之)とあり亦た解す可からず依て
 試に私説を記す云く水○中○とは水字中に在るを云ふ文布は行

の義とす文を以て世に布くは行なり水行二字を合すれば行
 とある梁武帝諱は行あり蕭自善降之は國難は國君行あり自
 から善く降す故に傳教に妨なしと云意なり
 此時尊者の示偈に路行跨水復逢羊の句あり傳光錄今本路行
 の傍注に航海三周と書す尤も由あし路行跨水は矢張行字な
 り行字水を跨たけは行となる羊は王者の象なれば羊字頭尾
 を去れ王なり一句にて行王を云ふ即ち武帝なり逢ふと雖も
 道契合せす獨自栖々暗渡江栖々は借音博々なり下二句は魏
 に入て後の消息なり異説あり猶は考ふ可し
 汝彼土に至らば南方に住すること勿れ南方は只爲有の功業を
 好んで佛理を見ざるなり云云偈二首を説て識記と爲す初祖之

を心受して而して尙は本土を起たす尊者の左右に執侍するこ
 と四十年にして尊者入滅なり初祖と同時南天に佛大光佛大勝
 多と云ふ二師あり俱に佛陀跋陀に従て小乗の禪觀を學ぶ佛大
 光は終に般若多羅尊者に逢ふて印記を受け初祖と化門を同ふ
 す佛大勝多は尙は門徒を分つて六宗と爲す曰く有相宗曰く無
 相宗曰く定慧宗曰く戒行宗曰く無行宗曰く寂靜宗此六宗佛事
 に外なるにはあられとも宗々各々已解を張りて異々別々に
 化源を展ふ故に六宗同く佛教にありあから邪見解に落つ初祖
 彼の六宗を悲しんで一一彼れに詣て之を開誘す彼の六衆の徒
 咸く歡喜し誓て正宗に歸依す般若多羅尊者識記の偈に二株嫩
 桂久昌々の句あり乃ち佛大光佛大勝多に當る如し此頃初祖の

聲名は大に振ひ西天東土に喧傳したること知る可し斯くて慈
 師尊者遺誠の如く其滅後六十餘年に及ひ東土の化縁熟するを
 知て渠に赴かんと欲す時に印度は初祖の侄異見王の治あり王
 の曰く此國何の罪あり彼土何の祥ある大叔既に縁有り彼に赴
 んとす侄等得て止むべきにあらず唯願くは大叔父母の國を忘
 れず早く事を竟ゆ過かに歸來せよと云て悲慟涕泣す
 初め般若多羅尊者初祖に告て曰く如來の正法眼藏涅槃妙心を
 以て大迦葉尊者に付囑せられてより如是展轉して乃ち我に至
 る我今偈を作て如是大法を汝に付囑す偈に曰く
 心地生諸種因事復生理果滿菩提圓華開世界起
 此偈上聲四紙の韻を押す或人謂ふ此偈もとは天竺の伽陀なり

梵語にてありしを此に記するは華人の譯述ありと其思想は理
 おきにあらず而れども此偈決して唐譯等にあらず尊者の自作
 疑ふ可からず此時代漢土は南北朝の中世にして漢土と竺乾と
 交通頻々あり留學の士も迭に絶ゆることなし漢土學士にして
 悉曇梵文に通曉するもの珍らしからず竺土學士にして漢籍唐
 音に精しきもの亦た奇と爲さず看よや現行の一切藏經は歷代
 唐三藏竺三藏の兩譯ありて孰れも精美ある漢文にてそある是
 れ漢と竺と兩通の學者兩國に多かりし現證あり

此頃華竺兩通學者兩國に漫々たりしとは本文の如し而して
 中華に佛法の旺盛ありしも此時代を最とすしかも上等社會
 に崇信せられて列國君士より名公鉅卿に至り信佛不信佛に

論ろんあく平へい常じょう清せい談だんにも内ない典てん外がい典てんを混ま用ようして理りを採とる風ふうなり東とう土どにして爾にかり西せい天てん焉んを爾らさるとを得えんや南なん北ほく史しを讀よんで概がい略りやくを知る可べし

況いはんや般はん若じやく多た羅らと云いひ初しよ祖そと云いひ漢かん學がくに暗くらき様やうなる不ふ便べんはわらす去されば初しよ祖そは廣かん東とうに着ちやく岸がんするや直ちやくちに進しんんで梁りやう都とある金きん陵りやうに至いたり武ぶ帝ていと問もん答たするに立りつ派ぱに漢かん語ごを用もちひて一いっも滯とほるとなし爰こゝを以もつて尊そん者しやくの囑しよ偈けは譯やく文ぶんならさるとを悟さとる可べし後ご世せいを以もつて悞ご解かいすると勿なれ

初しよ祖そ大だい師し始はじて東とう土どに至いたり梁りやう武ぶ帝ていに相あ見けんして機き機き投とう合ごうせず去さて魏ぎに往ゆく魏ぎと梁りやうと只ただ一いっ帶たい揚やう子し江かうを隔へだつるのみ而しかして南なん北ほく相あひ宿しゆく讎しんの國こくあり今いまや初しよ祖そ梁りやうを辭しして魏ぎに入る危あやからすや初しよ祖そ豈あ

に安あん危きを察さつするに疎そならんや請こふ聽きけ説せつかん語ごに云いく私わたくしには車くるま馬ばを通とほし官くわんには針はりをも容いれすと爰こゝの謂いなり初しよ祖その梁りやう武ぶに接せつする問もん答たに於おては一いっ點てん假か貸たいせず是こゝれ武ぶ帝ていを磨ま礪りして針はりを容いれさるあり而しかして温おん言げん歎たん語ごの場ばに逢あふては別べつに親しん切せつする處ところあつて帝ていを感かん化けせり車くるま馬ばを通とほするの妙みやくなり初しよ祖そ袖そでを分わかつて魏ぎに行いく帝てい欽きん慕ぼの念ねん堪かゆると能あたはずして還かへた留とどむると能あたはざるの情なさけ状じやうあり終つひに皇わう女によを出いして從したがはしむるに至いたる尼に總そう持ぢ是こゝなり總そう持ぢの魏ぎに入るや梁りやうには魏ぎを觀かん察さつると爲なし魏ぎには質しちを得えると爲なす初しよ祖そは不ふ言げんの中ちゆうにして兩りやう國こくを相あひ爲なす爲なす爲な也なり者もの治ち也なりの注しゆを用もちゆへし梁りやうを辱はかしめす魏ぎを傲ごうらしめすして公こう主しゆを安あん綏いに保たもつ此こゝ効きう遂すいに二に國こくを和わ平へいせしめたり此こゝ段だん初しよ祖そは固こより説せつかす史し

家短視の得て鏡ふ所に非らず世外と稱する道人等争てか此に見わらんや初祖獨照の處なり初祖は九年默坐して如來の妙心妙宗を成就す焉んそ二國の爲すを意とせんや爲すに非らずして此游戲あり二國に鴻福を授く是初祖の手段千々あり總持の眉毛秀々あり僞道人云ふ納僧は國家の治亂興亡を説かすと國家清平を禱る豈納僧分外の事と謂ふ可けんや

初祖大師は普通八年十一月廿三日を以て洛陽にいたり嵩山の少林寺に寓止して面壁而坐終日默然なり此意は魏主か不肖にして知らざるのみならず山河大地も知らず唯因縁あらんもの乃ち能く知らんのみ菩提流支三藏と光統律師と並に深く之を知る知ると雖も知ると言ふこと能はず已か邪見に蔽はれて已

が身を救ふこと能はざるあり心愁へては花にも涙を濺くなり意ろ僻かみては月をも悪くみ花をも怨むなり初祖の道に照らされて已か邪見説のふさかるにぞ照らす道をは恨むるあり照らす初祖をは悪むく意の起るなり悪む意の起りてよりは花にも悪くみ月にも悪くみ風にも雲にもやる瀬なく悪くみ怨らむなり初祖はその訕謗をもその邪心をも悪くます怨らます一向きくに及ばす初祖は釋迦如來より正法嫡傳の行持もて我か行持とばなせり之を世界に弘通するそ自家の行持ある弘通はなせと賣弄はせず壁立万仞あり流支も光統も一方の宗匠なり初祖の道を聽て敬服せざるには非らず敬服しかから尙ほ悪む所以は初祖か不退の行持に居て已等か邪智妄念に同道唱和せさ

るを悪むあり届きかたきを悪むあり顯はに悪くめは佛慧に背
くを知るか故に悪むの情は已か心に惡むあり已れあからに已
あ心をさる攻るまてに初祖をば悪み奉る其の心の制し難さに
何もわきまへかねてやたけこゝろに亂れてはうたてはかなき
妄念は生ずるふんめり儲は彼の二師は外道かといふに外道に
あらず三藏なり律師なり三藏とは如來の一切藏經律論を負
荷すると云ふゆるしの名あり律師は元より七佛傳來の戒相律
義を専門と爲す宗師なりかくてありあから已等か崇奉する大
恩教主釋迦牟尼如來正嫡の正主たる初祖を惡むは已を惡んで
已か肉を噛み破る流なり至愚と云はんも底の知られぬ至愚に
てそありける此の如く説けは流支光統のみしれものゝことく

あれども之と如同のしれもの世には多かるなり絶へざるなり
此等の流は法の爲にするに非らず身の爲なり否名の爲なり名
利の爲なり何事も名聞利養の爲にするなり初祖大師の第一に
疎み嫌ふ所なり初祖は名利を避けて行持を求む干劫不易万劫
不退なるは唯此のみ二師は我執終に除かず曾て争をばさる初
祖を惡くみてあられざる振まひをもあすにいたれりかなしき
こゝろにてはありけり初祖は觀想して謂へらく此國をば佛土
とばなしたり今はばや化縁の盡くる時にこそ嫡傳の大法は神
光大士二祖慧可尊者を得て悉く傳通せり一器の水もて一器に
移すことく飽かさるところなし吾事已畢る逝去す可しと言了
て坐化す實に梁の大通二年十月五日あり○魏には孝莊帝永安

元年あり世に初祖大師の記傳を誌すもの悉く梁の年號を用ひて魏を用ひす實は初祖の東傳は梁には途を取られし迄にて化儀は専ら魏にあり廿七祖の遺誠にも南方は禁せられ初祖も忌みませるされは余は魏を用ひんと思ふにいかある因縁の有りてか永平高祖も梁を用ひ玉ひたれば今はそれに從ふになん高祖は拘はらす用ひ玉ひしにやあらん

山僧粵に初祖の行持を撮録する行持の萬分の一に酔ふるに足らす諸仁者委悉を知らんと欲せば永平高祖の正法眼藏行持の卷を緝くにしかす初祖の行持は眼藏にあり初祖の正宗は永平にあり釋迦牟尼如來妙明心源の正宗正嫡を東土に傳へたるは初祖一人なり諸流ありと雖も他は皆お傍系なり

筆を擱くに及んで再び言ふ菩提流支三藏も光統律師も惡人にてはあらず我見人見の除かざる爲に邪見人とはあれり心源を了得せされは萬法皆お仇となり心源を宗とすれば萬法如意圓滿なり山河大地此意を亮せよ

靈松達淳老師法益筆記

佐藤騰雲

○師曰く宗教とは八宗九宗の別を言す凡そ釋迦佛教を總稱する名なり之を解釋すれば釋迦如來正宗教義と云て惑ふことなし爰に於て一問あらん宗の字義は尊とあり本源の意なり此には本源自性の義を取る釋迦如來は何を本源とあし何を宗と爲

すや簡易にして道理を盡くすの一語を聞かん答て云ばんに成程諸經論の説を擧げて答話せんには横説豎説極まりなき深理ありと雖も只一句に道着して宗の義を盡くすには別に工夫あらん碧巖種電鈔に宗の字を解しあり曰く妙明心源を以て宗と爲す云々これよく云つくしたり夫れ妙は甚深微妙の妙あり言語道斷の相なり衆生も不可得如來も不可得の處あり一切諸善法森羅萬象凡そ理の究極する處物の起盡する處此妙を離れず而して此妙の至極に於て如來妙と衆生妙と二相を現す衆生は妙を死處と爲し如來は妙を活路と爲す所謂死處と爲すとは衆生は萬法を妙に歸して萬法の妙より生ずるの理を究めすたとへ此理を知ると雖も此理を體取し我か物と爲し應用すること

能はず故に妙を死處と爲すと云ふ如來は萬法妙に歸するの極處を究盡し却來して明々地を修證す乃ち人天に教を垂れて三界の大導師となるこれ妙を活路と爲すなり明々地の修證とは何ぞ但獨自明了あり其人にして自知す可く餘人所不見の法あり如來は因地の修行に依て萬法獨妙の極處を究盡し萬法獨妙の活路より却り來て端坐六年なり一見明星あり一見明星即ち是れ明々地の修證なり一見すれば如來なし明星即如來なり如來即明星あり此間に山河大地なし山河大地即明星なる故に是を明星三昧と云ひ是を修證三昧と云ふ如來は一見明星を以て妙明心源となし妙明心源を以て宗となす今ま一度説示せんに妙の極處は未だ以て宗とするに足らず妙極の區域に住せず端

坐六年する宗の根源なり一見明星宗の為人垂手なり
 ○師曰く今晚は達磨廓然の一則を平話に談す可し本則に曰く
 梁の武帝達磨大師に問ふ如何なるか是れ聖諦第一義磨云く
 廓然無聖帝曰く朕に對する者は誰を磨云く不識帝不契遂に
 少林に到て面壁九年
 師曰く武帝は當時佛心天子と申し聞こへたる大の佛教者あり
 去れば達磨に出逢て未熟らしく俗諦は問ふに及ばず眞諦乃ち
 聖諦に於ては何を第一義と爲そと問ふたり素人にはわらす達
 磨は蚤くも見てとり帝は三藏者流の所説を立て眞俗二諦の分
 別を氣にされるものなりよし一番膽を冷やし參らせんと思ひ
 先づ盡十方世界を摘まみ上げてそれ御覽せよと示したり此摘

み上げたる盡世界を頓て廓然と名目したるなり盡世界は八面
 玲瓏此の如きものなり此中には聖諦たの俗諦たの左様の怪物
 はござさい無聖て御坐ると遣つたり無聖の裏に無凡はあり不
 生の故に不滅と云ふ格そ武帝も苦勞人なれば達磨の答處は聽
 得たり悲いかな耳處に聞て心處に聞かさりしかは自身が法界
 の中に居るとを打忘れたる爲に達磨か法界中に住するとも
 併せて打忘れたり底て達磨の蛻殻がそこに居るを見て這やつ
 怪物ござんなれど構へ朕に對する者は誰そと問ひ込たり達磨
 は何の疑もなく不識と答たるは武帝殿が眞諦や俗諦や朕や汝
 やの詮義にて兎角に二邊待對の病に苦しむ達磨は其病苦を救
 ふ爲め待對不識の答あり爰の出逢にては此不識と云ふ答か達

磨の親言親句あり梁武か聽き得さりしは千載の遺憾なり古聖の親切は詢に斯の如きものあるかな余は爰に到て涙の紙を沾らすを覺へず流石は達磨あり何と能く授けたるに非らずや釋迦も言ふ可く彌勒も爾云ふ可し斯く申す達摩も此外なし三世諸佛不識なり狸狽白牯不識なり不識底不識なり切に陛下白す陛下下飄巾あるふわふわしたとを仰するなよと云ふ親切の中に聖諦第一義を一箭に射透したる答話なり然るに帝不契爰は實に不契なり宏智は爰を來機逕迂(ゆきちかひ)と評し山僧は南無三と着語するなり達磨屈せず少林なり廓然の話に到少林迄を言ふは饒舌の如し如何ん咄々梁武の問答は到少林を言ひ起す秩序なり前の問答に因て盡法界無聖無凡無我無人無衆生

無壽者の説法は盡くしたり此上九年面壁は何の爲を達磨はただ用が有る達磨は釋迦廿九世正傳の佛心宗と云ふ重荷を負ふて居る此宗を舉揚せねばならぬと云ふ眼玉に似合はぬいとも優しき大慈大悲の爲に九年坐了少林山なり諸大衆報恩謝徳の一句を呈せよ

○師曰く永平高祖御詠に教外別傳を題にて

荒磯の波もえよせぬ高岩にかきもつくへきのりあらはこそ此御歌丈け高く言葉ふくみていといと貴ときことになん此上の句を教外の宗旨を云ふと看ては違ふ爰は説無説傳不傳の相に涉らす七佛相傳の宗旨を高岩とは云ふあり釋迦も無説達磨も不識の法門ありさればこそ下の句にかきもつくへきのりな

らへこそ經にも論にも書付へき法にてあらはこそと言ひ留め
られたり然れども學人は不説不識と云ふに泥みて此道をすつ
れば佛法は即ち滅却するなり達磨はこゝを憐みて教外別傳と
云ふ宗旨を示されたりそれをうけて此御詠は有るあり妙明心
源に參得するものは別傳の旨を得ん○傘松道詠略解と云ふ二
冊の本に注する所は由なし

○汝等彼の黄河を觀るや黄河は四百餘州北半面の水を濫へ落
て海に入る大なりと云ふ可し而して四大海を檢するに悉く只
潮水あり未だ一滴の河水を見ず黄河たり大海たり其湛ゆるも
のは同く是れ水なり但河に在ては水となり海に入ては潮とな
る修證の現成なり轉凡入聖の證契なり早々長江不斷の妄浪を

去て頼に法性海中に洋々を樂しむ可し

○又云く汝等去て彼の水田を看よ香稻垂々たり秋穫漫々たり
那の香稻是れ佛種子の供養あり佛慧命の相續あり夫れ然り而
りと雖も尙ほ一着あり曰く香稻と雖も修功を假らすして法喜
禪悅には充つ可からす彼の垂々たり漫々たるものは野草の地
に蔓ると何そ異あらん野草に混して田に捨なば明年又た野草
に混して生し彌々久ければ愈々滋蔓して終に除き難きに到る
へし凡夫衆生も亦た爾なり衆生曷そ自から卑下して身は是れ
野草ありと云はんや人々本有の徳を照顧すれば吾人齊しくこ
れ膏粱の材あり佛種子にあらざるものあらんや人々箇々法喜
禪悅の資なり豈に自から野草とあつて秋風の離々たるを歎か

んや汝等既に佛種子なり已に膏梁の徳を具有せり悞て稻草輪
廻に沈まんや將九膏梁となつて法喜禪悦に報せんや一たひ膏
梁とあらば一超直入如來地あり十方世界現全身あり疾く長河
不斷の妄波を超て頓に法性海中に洋々を樂しむ可し云云
○因に粃と米との辨を作さん粃と米と別なるにわらす畢竟稻
の實あり今者此の稻實もて出家人に喩ふ我はこれ出家人なり
と云ふとも出家の行持を爲されば稻の粃の儘にてあると同
しくて米の用は爲さず法喜禪悦の食にはならず出家は必らず
戒定慧の器械に掛けて磨りもし春もして精米とあるからに法
喜禪悦の料とす可く出家の功德は現成するあり名は出家なり
とて戒定慧の修功あくは何の効を致さん是出家かと思れば作

業は在家なり在家かと思へば頭顱かんと出家の様子なりわか
らぬ蝙蝠にして鳥か鼠か片付かぬ者にこそ此等は得難き人身
を得て遭ひ難き佛法に遇ひたる甲斐もあき罪造と言ふ可し縱
しや其身は罪を負ふとも不實に往けは咎めもせじ此等の輩か
徘徊して佛法を漬す段に到りては呵責せざること能はず法性
界中の大罪人なればあり然らば在家に還るかた優るかと思ふ
に決して左様には遣らす一旦佛を欺き法を亂したるものおれ
は矢張り出家の満中に曳き出し責て責め据て回光返照の
道に歸せしむるこそ亦た戒定慧の信施なり信受あり如來は現
世後世弟子の爲に誠に安らかに護持の成る様に戒定慧を三學
とあし授け玉へり三學の中に戒を第一と爲す定慧は中に具は

る故あり戒に住すれば威儀も立ち定慧も欲けす眞出家と稱す
 へし大悟發明は其上の事なり像未の機を斟酌して許るす可き
 は許す可くとも許しかたきは慚恥の法なり諸大衆よ一の慚恥
 は必らず守る可し忘る可からず血泣して告る所なり或る一老
 僧の許に小沙彌あり請ふて云く少時暇を玉へ老僧曰く何用わ
 る沙彌云く市に行て天麩羅の立食を試みんと欲す老僧曰く慚
 恥を忘るあよ沙彌云く歸來必ず慚恥を行はん老僧曰く善し傍
 人問て曰く慚恥ある者は喰はさるへし沙彌は喰て後に慚恥を
 行はんと云ふ老僧善と云て之を許すは何そや老僧襟を正して
 曰く此れ慚恥の道を習はすあり沙彌の喰ふを禁すれば慚恥の
 道生せず之を許すに因て慚恥の念生す喰ふの咎は一時なり慚

耻の法は萬劫なり余は輕重を視て之を許すのみ傍人聽て歡喜
 せしとそ慚耻の道は此の如く深重あり出家僧は必らず此道を
 保つ可し戒定慧の能入なり戒定慧の所入なり出家僧にして戒
 定慧の念想なきは叔坊主なり一方の尊宿たりとも叔尊宿なり
 一日一夜なりとも御膳上等の精米長老とあれよよ諸大衆よ
 しか

風月堂松濤居士の日頃歸依僧なる妙明道人は宗教といふ意義を簡略なる一語に約して唱示さん古語やあるとてあまた書ともわさられたりけるにこたひかかひたる語を得られたりとて一座の法話をば開かれしを打聞く儘に書付たるは此鈔一部にてあんなれ風月の居士とりよみて同しくはとて印本となし遠近人にわかち贈らる、こと、わなりぬこの略鈔おもこれよみたらんには簡略なる要語を得るはものかは宗教の奥義をも悟り得らる、ものにこそあるなれ風月居士はさせる功德としもおもはされど善果は居士の身にそいたらんめてたかるわさにこそとて事書するは自靜居士

跋

原夫藥不執方隨病而設然衆生病非一二故療
之藥亦千萬無量也殊至妙明心源猶若患痼疾
者然矣遽不醫殆乎至于難治之危也頃佛門鯉
龍達淳禪師作此鈔風月松濤居士受之附印刷
而施與十方群生云可謂補擊得其處矣予讀之
一過擊節直叙隨喜之言者亦是同病相憐之謂
也耳

高橋泥舟居士

明治二十四年十月四日印刷
同年同月五日出版

〔非賣品〕

著者

長野縣北安曇郡大町
靈松寺住職

安達達淳

發行者

東京市下谷區池之端七軒町
二十四番地慶安寺住職

鈴木良音

印刷者

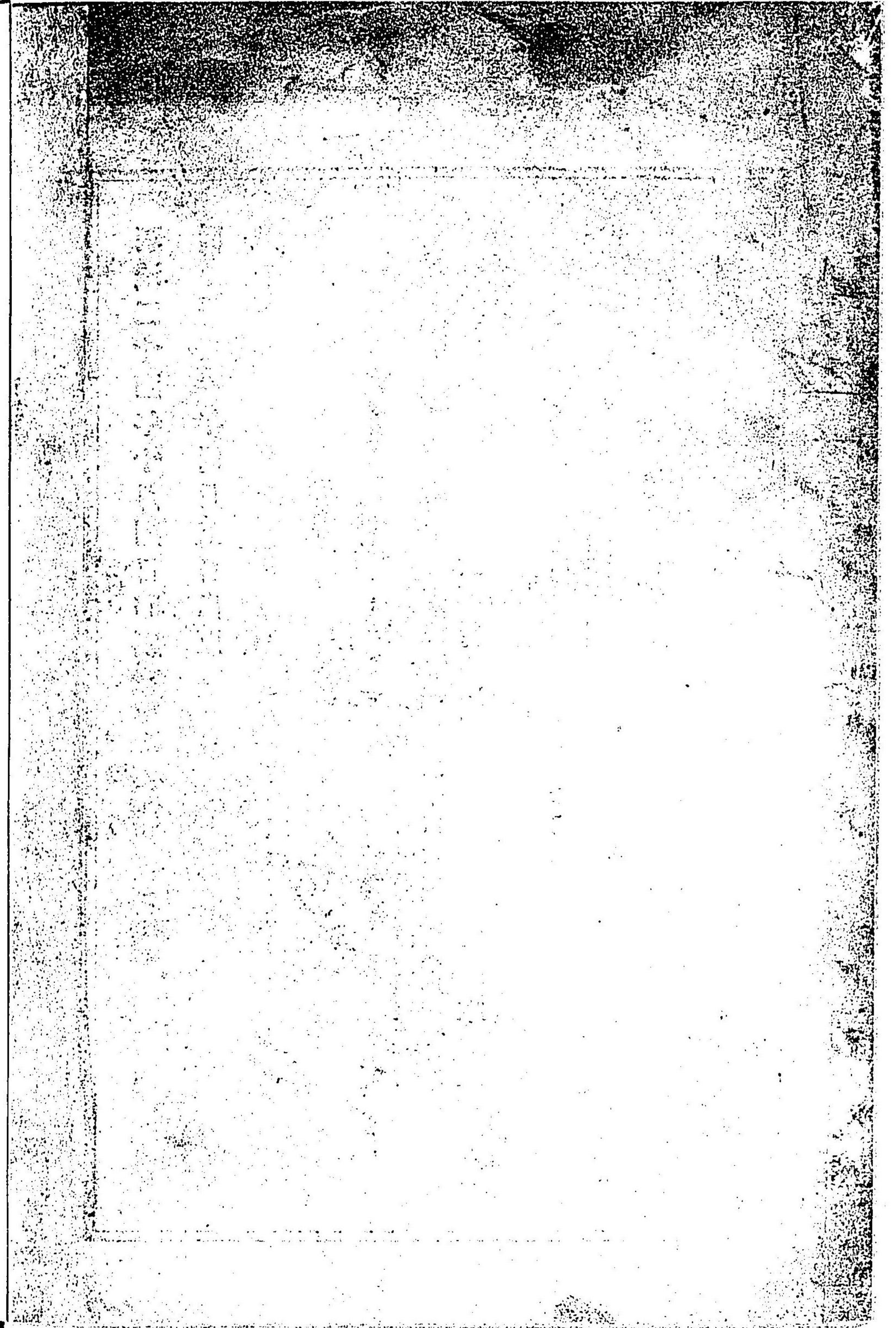
東京市京橋區西紺屋町
廿六番地

島連太郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町
廿六七番地

秀英舍



[Redacted]

特45

888

妙明心源略鈔

国立国会図書館

019850-000-1

特45-888

妙明心源略鈔

安達 達淳/著

M24.10

ABG-0681

